（別紙２）

大学紛争当時の事務局の状況

大阪大学の紛争は、昭和43年2月頃から始まり44年12月までが最も激しく、執行部は勿論のこと教育部門と事務部門の被害が大きかった。研究・実験部門についての被害はあまり大きくなかったように思う。大阪府警機動隊の導入で封鎖解除をした執行部の強硬措置によって、その後は徐々に正常化に向かいつつあったが、利根山・宮山寮生や他の学生団体との間において、交渉軋轢があって完全正常化にはまだ１，２年はかかった。

全闘委が豊中キャンパスで集会しデモをするとの情報が入ると、これらの情報収集に、また総長や評議員と大衆団交が行われる時や、建物封鎖の情報が入った時は、事務局職員は警備要員として必ず駆り出され、特に庶務課の職員は、中心になって行動しなければならないので、落ち着いて事務に専念することができなかった。

例えば庶務掛、秘書掛は執行部の世話や部局長会議、評議会の設営に、全闘委の襲撃を避けて会場や落ち着き場所を探し、部局の会議室や学外の施設等を借りなければならず、また召集の連絡、会議資料の作成と搬送等に奔走した。

調査掛や他の掛は情報集めと、総長告示や大学当局の学生向け勧告掲示の作成・印刷、学内搬送、掲示等々、次々に出される文書の扱いに振り回された。特に能筆の掛長は、度々出される告示・勧告・掲示文を書くのに大わらわで、悪筆の私は内心助かったと思うほど気の毒であった。

豊中キャンパスの封鎖解除では、封鎖されている教養部や学部の教職員は勿論のこと、事務局職員も早朝から総員出動で、警備と解除後の整理の応援に出張った。

また全闘委の数名が、初めて総長室に直談判に来たことがあり、秘書掛が懸命に断っても聞き入れず声高になった時、庶務課長がすっと立ち塞ぎ「これだけ言っても聞けないのですか！強行するなら不法侵入として警察を呼びますよ！」この大喝で、さすがの彼らも驚いて引き上げたことがあった。

全闘委の襲撃を受けた当時の本部松下会館には、一階が経理課、二階が人事課・庶務経理両部長室、三階に総長室・事務局長室・庶務課、四階に会議室があり、主計課と施設課は隣接の旧本部建物内に文部省施設部出張所と別室にあった。（襲撃は松下会館が目的なので旧本部建物は難を逃れた）

襲撃の情報が入ると直ちに庶務課長の総括指示で、一階は経理課長が指揮して玄関ガラス戸や経理課ガラス窓に、ロッカーを並べ机も積み上げるなどで、職員全員が協力して防備対策をし、それにもしもの場合に備えて、箒やモップなどを持ってそれぞれに防衛部署についた。

玄関の車寄せに梯子を掛け、二階窓を破り乱入しようとした時は、三階の窓内側から２本のホースで放水し抵抗防御して退却させた。その夜は警戒体制をとってパンをかじりながら男子全員が泊まり込んだ。１月の寒い夜ではあったが机の上や絨毯の床にゴロ寝で夜を明かして、緊張の上にも面白いような刺激のある一日であった。

これまで全闘委たちとの衝突では、教官がスクラムを組んで阻止していたことはあっても、事務職員がこのような形で抵抗したのは例のないことであって、襲撃学生に事務局職員の気概を見せつけ、また違和感を与えたようである。
しかしその抵抗が、かえって刺激を与えるという学内の非難があったので、その後は、再度襲撃された場合の争いを避けるため、庶務課・人事課・経理課は重要書類と常務書類を外に持ち出し、旧本部建物やその他の施設に移って仕事をした。まもなく松下会館は全闘委に封鎖されたが、１か月余りして彼らの姿が消えた状況になったので、我々職員の手で自主解除した。
このような状況は封鎖されている学部等にあっても同様で、教授会は他部局の会議室やホテル等を借りて開催。事務部門も重要必要書類は他の施設に持ち出して、仕事をする難儀な状況であった。
封鎖解除では、全闘委が本拠にして占拠していた教養部本館は、屋上に旗を挙げ玄関から廊下・階段まで、机・椅子・ロッカーでバリケードを築き、角材・石礫を備えて要塞化された砦であった。　屋上からの妨害を排除しながら、府警機動隊が一つずつ撤去していく、まさに戦争の様相であった。
解除されて中に入ってみると、教授室は寝泊まりして散乱の仕放題、廊下や壁にはスプレーで落書きがあって、破壊と乱雑な彼等の不節制な生活を見て驚いた。その後始末がまた大変な作業であった。このことは封鎖されていた他の文・法・経済各学部や、その他の学部においても、教養部本館ほどではなくとも、相当に荒らされた様子であった。
建物の封鎖解除があっても、全学連は白ヘル（中核派）・赤ヘル（核マル派）・黒ヘル（民学同派）の諸派に別れ、それに民青の学生団体が加わり混乱して、権力争いが各地で行なわれ、ひどい時には角材・鉄パイプを持って、乱闘騒ぎまで起こす有様であった。
封鎖解除後も豊中キャンパスで集会があり、騒ぎが起こりそうな情報が入ると、直ちに基礎工学部長室を総長以下執行部の前線基地として、情報の収集・警備、全闘委に対して警告と解散勧告のアナウンスを、警備・報道担当の教官がされるので、これを支援して庶務課職員が活動した。
このように我々に召集が掛かれば、何をおいても駆け出さなければならないので、何時もその態勢をとっていたので、落ち着いての平常業務もままならず、来年度の入試事務が始まっていた時などは、業務に間違いの起こらないことを一番に心配した。
今思えば当時は、紛争に明け紛争に暮れて振り回された日々であった。
この様な時期に建物の封鎖解除やキャンパスの警備は勿論のこと、入学試験や入学式が無事実施できたことは、誠に府警機動隊の協力のお蔭であった。

以上